Library and Information Science No. 13 1975

志賀重昂の地理学
— 書誌学的調査 —

Shigetaka Shiga's Geographical Works,
— A Bibliographic Survey —

源　昌久
Shokyu Minamoto

Résumé

The purpose of this article is to present a new material to study a history of geography in the Meiji-Taisho era through a bibliographic survey with particular reference to Shigetaka Shiga (1863-1927), a great thinker of enlightenment, and his geographic works.

A bibliography of Shiga's geographic works was compiled, to which bibliographic annotations are added. Most of the works were located in large libraries and various editions and versions were identified. Upon these findings the position of Shiga's "Geography" was discussed.

第 I 章　序
第 II 章　著作目録
第 III 章　書誌的注解
第 IV 章　地理学専門誌に於ける反響
第 V 章　志賀の地理学　(I)
第 VI 章　志賀の地理学　(II)

第 I 章　序

——志賀重昂50回忌に寄せて——

本稿は志賀重昂の地理学関係の著作の書誌学的研究を通じて，明治地理学史の研究のためのひとつの素材を提供する試みである。

明治・大正時代の思想家，志賀重昂の地理学を論題にとりあげた理由は，単なる『明治百年』という懐古趣味からではない。志賀の地理学は現代地理学の学問的反省のためにも，顧みて研究すべき十分な意義を有していると考えられるからである。

今回の作業で志賀の地理学の著作目録を作成するにあたり，単行本については，早稲田大学図書館，国立国会図書館，一橋大学附属図書館，慶応義塾図書館の蔵書に限定した。雑誌については，上記の図書館の他に，東京大学理学部地質学教室図書室に限定して調査を行なったものである。

調査の結果，以上の図書館を全部併せても志賀の著作の各版を完全にチェックすることはできなかった。また目録の不備も相当発見された。従って，本稿は志賀の地理学の書誌学的研究の第1報という意味をもっている。筆者はさらに引続き調査を進め，機会をとらえて，その成果を後日発表したいと考えている。

はじめに，志賀の地理学の背景となる，日本における地理学の系譜を概略的にみてみよう。

源　昌久：海事資料センター
Shokyu Minamoto, Library for Maritime Affairs.

第1には，〝地誌の編纂〟の系列がある。これは大きくいって，8世紀の日本風土記→江戸時代の各藩における藩内の地誌作成→明治維新政府における「皇国地誌」の編纂という流れである。これは，一種の中華思想に基づくものともいえるが，その編集主任である内務省地誌課長の塚本明毅の転任とともに壊滅して，この系列は，近代地理学には継承されなかったといってよいであろう。

第2には，〝洋学輸入の地理学〟の系列がある。これには，2つの流れがある。ひとつには，中国の明末清初の耶蘇会士の活動に源をもつ地理書の影響を受けた流れである。例えば，新井白石「采覧異言」(正徳3年 1713年）があげられる。他のひとつは，江戸期後半，蘭学による研究にともなって，舶来した地理書の邦訳の流れである。例えば，大槻玄沢「環海異聞」(文化4年 1807年）があげられる。しかし，この系列は，一部の武士階級あるいは，為政者のための世界地理であり，近代地理学には水脈となって継承されなかった。

第3には，〝天文学・暦学による地図作製〟という系列である。蘭学の解禁（享保5年 1720年）以後，蘭学に接し天文学・暦学が発達し，高橋至時，間重富等の人材が輩出した。これにより，図らずも日本地図学の基礎ができあがった。至時の嗣子，景保の「新訂万国全図」(文化7年 1810年)，伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」(文政4年 1821年）が完成した。この流れは，明治時代の旧陸軍参謀本部の測量事業に受けつがれていく。

開国（安政元年 1854年）前後になると，国内では，世界各地の知識・情況を知ろうとする要求が高まってきた。その結果，世界地誌の翻訳，世界事情の案内書が多数刊行された。例えば，清の「海国図志」(8冊)を鹽谷宕蔭等が邦訳（嘉永7年～安政3年 1854年～1856年)，正木篤訳「英吉利国総記和解」(安政元年 1854年)，仮名垣魯文「万国人物誌」(文久元年 1861年）等である[1]。

以上の著訳書は文献による世界知識であるが，その後厳禁されていた海外渡航が可能になってから，自己の見聞により得た知識を記述したものがあらわれる。それが慶應義塾の創祖，福沢諭吉の「西洋事情」(慶応2年 1866年）であり，当時，15万部以上出版され，洛陽の紙価を高めた。又，福沢の「世界国盡」(明治2年 1869年)，内田正雄（恒次郎）訳「輿地誌略」(明治3年 1870年）等文明開化の啓蒙書が地理学関係でも続々刊行された。福沢，内田等の著作は外国に関する知識を与え，新しい日本の進路を国民に示唆し，江戸時代まで外国に関する知識は一部の武士階級に限られていたが，これを庶民・老幼にまで拡大させるという効用があった。しかし，これらの著作は国名，山，川等を項目別に羅列し，素材中心に，功利的に知識を与えようとするもので，この点では，これらは以前の著作の連続とみられる。

近代国家を目指した維新政府は富国強兵政策を強引に遂行してきたが，その政策の遂行のためには，内外の正確な地理的知識の獲得が何よりも先ず要求された。また地理学の学会として，明治12年，東京地学協会が英国王立地理学会を模倣して設立されるが，そのメンバーには，政治家や軍人が多数ふくまれていたという事は，当時の情勢をよく反映している。(創立当時，社員96名中，皇族2名，華族20名，軍人31名，官吏33名，民間人10名であった)。[2] 又，国内の地理的知識(統計的知識も含めて)の要求に対して，統計局「第一回帝国統計年鑑」(明治15年 1882年)，細川広世「日本帝国形勢総覧」(明治19年 1886年)等が刊行された。

全国的規模での地名辞典，府県志が明治10年代後半から20年代にかけて，多数出版された。例えば，河井庫太郎編「日本地学辞書」(明治14年 1881年)，同「大日本府県志」(明治23年 1890年)，吉田東伍「大日本地名辞書」(明治33年～明治40年 1900年～1907年）等がある。

日本での近代地理学の大きな潮流は，上述のような流れではなく，大学を中心に栄えた。それには2潮流があった。1つには，自然に関する地理学であり，明治10～20年代にかけて，理科大学教授小藤文次郎らは，地理学を地学 (Erdkunde) としてとらえた。彼等は，西欧の科学的思考や方法を紹介した。

他方，人文に関する地理学は，明治20年代頃から，リース (Ludwig Riess) によって，文科大学に史学科が設立され，その西洋史学を通じてひろめられた。

このような内で，20年代後半，アカデミックな地理学とはニュアンスを異にする，ユニークな地理学者が出現する。それは志賀重昂，内村鑑三である。彼らは環境論の立場から地理学を異色なる観点でとらえた。本稿では，彼等の内，志賀重昂について述べる。

志賀重昂(文久3年～昭和2年 1863年～1927年)は，三河国岡崎(現在の愛知県岡崎市)に生まれた。その市内を流れる矢作(やはぎ)川にちなみ，矧川漁長とも号していた。彼は内村鑑三と同じく，札幌農学校の出身ではあるが，内村とは同級ではなく，直接の関係はない。卒業後，長野県で教職につき，すぐに辞職している。その後，南洋を

見聞し，「南洋時事」（明治20年 1887）を著述した。この書物が志賀の地理学に関する最初の著作といってよかろう。その後，彼は政治家，ジャーナリストとして，多忙な活躍を開始したが，地理学書の執筆及び地理に関する講演は，その間続けられた。又，早稲田大学その他諸学校においても，地理学の講義を行なっていた。

本稿では政治家，思想家として多方面で活躍し，多数の著述を残した志賀を地理学者としての側面に限定して，その著作の調査を試みたものである。

第 II 章 著作目録

この章の『著作目録』は，つぎの規則に従って作成された。

A. 収録の範囲

1. 期間

明治22年から昭和50年7月現在まで。

2. 対象となった資料

著作は筆者が地理学及びそれに関連すると思われるものに限定した。志賀重昂の著作（日本で出版されたものに限る。）を，(a)地理学，(b)地理学に関連する国内事情，(c)同じく海外事情，(d)その他，に分類した。論文は，主として「志賀重昂全集」（以下，全集と略す。）及び地理学専門誌によった。

なお，単行本は初版本にできる限りあたった。又，再版以後の著作でも必要なものはとりあげた。

B. 記載方法

単行本，論文共に刊行の順に記載した。単行本には，文献番号のあとに＊を付した。又第Ⅲ章の注解に記されているものには，書名あるいは論文名のあとに□を付した。

1. 単行本の記述

（1）記載の順序は，書名，肩書及び著者名（『志賀重昂著』以外の時のみ記入），発行所（東京以外は地名付記），発行年月日，判型，頁数（序，目次，本文等に分けて記入），定価，叢書注記，所蔵注記，全集に収録されている場合は，その所載頁を（ ）内に記入した。

その構成は次の通りである。

番号 書名 肩書及著者名

発行地 発行所 発行年月日 判型 頁数

定価 （叢書名） ＜所蔵機関名＞

（全集に収録されている所載頁）

（2）書名のきめ方は，標題紙，奥付を参考にして，きめた。

（3）頁数の記入の方法は，ノンブルのある場合はそれに従い，第何頁（『丁』）から第何頁（『丁』）をしめす。序文などにノンブルのない場合は，その総ページ数を記した。なお，数字は，原本に使われているものを採用した。

（4）定価は，奥付，広告等で判明したもののみを記入した。

（5）所蔵機関名の略称は，直接採録したものに限って記入し，次のようにした。

早稲田大学図書館は＜早大図＞，国立国会図書館は＜国会図＞，一橋大学附属図書館は＜一橋図＞，慶應義塾図書館は＜慶大図＞。

（6）全集では，原著を，部分的に削除，改潤がなされている場合も，ここでは，所載頁を（ ）内に記入した。

2. 論文の記述

全集より再録したものは，全集に所載された，雑誌名，発行年月日，巻号等の書誌的事項を記入した。

地理学専門誌（「地學雑誌」「歴史地理」）より直接，採録した論文は，次のように書誌的事項を記入した。

標題，筆者名（『志賀重昂』以外の号名等を使用した時のみ記入），誌名，巻号，発行年月日，記載頁。（全集に収録されている場合は，その所載頁個所）。

その構成は次の通りである。

番号 標題 筆者名

誌名 巻号 発行年月日 記載頁

（全集に収録されている所載頁）

但し，巻号，発行年月日，頁数の数字はアラビア数字を用いた。

3. 複数の人との，講演記録の記述は，(2)の記述の方式に従った。

4. その他

（1）使用漢字，かな文字は，著者目録，注解，解題の引用文では，原本に従い，略字，当用漢字は使用しなかった。

（2）〔 〕記号は，筆者が，必要と思われる語，数字を追加した場合に使用した。

→記号は，『…を見よ』を示す場合に使用した。

（3）序，緒言等で，内容を知るのに，重要と思われた書については，（備考）の項に記す。又，目次については，（内容）の項に記す。

(a) 地理学

1＊ **地理學講義**注1，2，3， 志賀重昂先生講義

敬業社　明治廿二年八月一日出版　四六判
本文〔表共〕一～八十八
＜国会図＞
（全集第貳卷『人文地理學講義』として，p. 185～342に所載）
注１：本書の内容構成については，第Ⅲ章書誌的注解の「地理學」のところを参照。
注２：初版の定価は，判明しないが，「日本風景論」（文献番号 2，以下『文献番号』を，⊗と略す。）の奥付裏広告に『地理學講義（第六版）　定價三十五錢』と記されている。
注３：書評が記載されている場合は，その詳細な書誌的事項は，第Ⅲ章を見る事．（→記号を付してある。）

２＊ 日本風景論□
版次により内容が異なるので，内容構成を詳細に記述する。便宜的に，版次を書名の直後に，（　）内に記入する。

日本風景論（初版）
政教社　明治廿七年十月廿七日發行　菊判
〔コマ絵〕〔１頁〕　目次〔１頁〕〔挿画〕〔１頁〕〔序〕〔１頁〕　正誤〔１頁〕　本文〔図表共〕一～二百十九丁[注1]〔自跋〕〔１頁〕　奥付　奥付裏広告一～四[注2]〔裏表紙に題詞（貝原益軒）〕
定價金五拾錢　＜早大図＞
（全集第四卷 p. 1～194）
注１：『丁』は正しくは『頁』。
注２：この広告欄には，『地理學講義（第六版）の広告及び新聞雑誌批判』が掲載されている。
（内容）目次
（一）緒論
（二）日本には氣候，海流の多變多様なる事
　　日本の生物に關する品題
（三）日本には水蒸氣の多量なる事
　　日本の水蒸氣に關する畫題
（四）日本には火山岩の多々なる事
　　（附錄）登山の氣風を興すべし
（五）日本には流水の浸蝕激烈なる事
（六）日本の文人，詞客，畫師，彫刻家，風懐の高士に寄語す
（七）日本風景の保護
（八）亞細亞大陸地質の研鑽日本の地學家に寄語す
（九）雑感
　　終
（〔序〕には，挿画をかいた雪湖樋畑，洋風の画をかいた海老名明四への謝辞がのべられている。）

２－Ａ＊ 日本風景論（再版）□
政教社　明治廿七年十二月廿三日發行　菊判
〔再版證標（コマ絵共）〕〔１頁〕　目次〔１頁〕〔序〕〔１頁〕　書評一～四[注1]　本文〔図表共〕一～二百二十三丁〔自跋〕〔１頁〕　奥付　奥付裏広告二～二十四[注2]〔初版證標（コマ絵共）〕〔１頁〕
定價金五拾錢　＜早大図＞
注１：「地學雑誌」6（71）より引用。筆者は峭南生及び山上萬次郎→⊗75，74，
（以後の 3，4，5，6，15版にも，この書評が付記されているので，そこでは細目を省略した。）
注２：この広告欄には，『地理學講義（第六版）及び日本風景論（初版）の広告及び新雑誌批判』が掲載されている。

２－Ｂ＊ 日本風景論（第３版）□
政教社　明治廿八年三月五日發行　菊判
〔初，再版の證標（コマ絵共）〕〔１頁〕〔第三版證標（コマ絵共）〕〔１頁〕　目次〔１頁〕〔序〕〔１頁〕　本文〔図表共〕一～二百二十九丁　〔自跋〕〔１頁〕〔中村不折の画〕〔１頁〕〔跋三題〕〔１頁〕　奥付〔奥付裏広告〕二～二十四[注1]　〔書評（地學雑誌）〕一～四　書評一～三[注2]〔付言〕〔１頁〕[注3]　〔裏表紙に題詞（貝原益軒）〕
定價金五拾錢　＜国会図＞
注１：２－Ａの注２と同じ。
注２：「帝國文学」（１）より引用→⊗79
（以後の 5，6，15版にも，この書評が付記されているので，そこでは細目は省略した。）
注３：『付言』とは，志賀が「利根川圖志」の著者とラスキンとを比較している文を示す。

２－Ｃ＊ 日本風景論（第４版）□
政教社　明治廿八年五月十九日發行　菊判
〔第四版證標（コマ絵共）〕〔１頁〕　目次〔１頁〕〔序〕〔１頁〕〔書評（地學雑誌）〕一～四　〔付言〕〔１頁〕〔書評〕一～三[注1]　〔コマ絵〕〔１頁〕　本文〔図表共〕一～二百三十三丁　〔自跋〕〔１頁〕　〔跋三題〕〔１頁〕〔中村不折の画〕〔１頁〕　奥付　〔奥付裏広告〕二～三十六[注2]〔初～第三版證標（コマ絵共）〕〔１頁〕

定價金五拾錢 ＜国会図＞

注１：「地質學雜誌」2 (17) より引用。筆者は小川琢治 ←⊗76

(以後の 5, 6, 15版にも，この書評が付記されているので，そこでは細目は省略した。)

注２： この広告欄には，『地理學講義(第六版)，日本風景論(初，再版)の広告及び新聞雑誌批判』が掲載されている。

2－D* **日本風景論**(第 5 版)□

政教社 明治廿八年八月一日發行 菊判

〔第五版證標(コマ絵共)〕〔１頁〕 目次〔１頁〕〔序〕〔１頁〕〔書許(地學雜誌)〕一～四 〔書評(帝國文學)〕一～三 〔付言〕〔１頁〕〔書評(地質學雜誌)〕一～三 〔挿画〕〔１頁〕〔書評〕一～三注1 本文〔図表共〕一～二百二十三丁 〔自跋〕〔１頁〕〔跋三題〕〔１頁〕〔中村不折の画〕〔１頁〕 奥付 〔奥付裏広告〕二～四十一注2 〔コマ絵〕四十二 〔初～第四版證標(コマ絵共)〕〔１頁〕

定價金五拾錢 ＜早大図＞

注１：「ジャパン・メイル新聞」(明治28年４月23日) より引用。

(以後 6, 15版にも，この書評が付記されているので，そこでは，細目は省略した。)

注２：この広告欄には，『地理學講義 (第六版)，日本風景論(初～第四版)の広告及び新聞雑誌批判』が掲載されている。

2－E* **日本風景論**(第 6 版)□

政教社 明治廿九年六月廿八日發行 菊判

〔第六版證標(コマ絵共)〕〔１頁〕 目次〔１頁〕〔序〕〔１頁〕 書評 (地學雜誌)〕一～四 〔書評 (帝國文學)〕一～三 〔付言〕〔１頁〕〔書評 (地質學雜誌)〕一～三 〔書評(ジャパン・メイル新聞)〕一～二 本文〔図表共〕一～二百三十三丁 〔自跋〕〔１頁〕〔跋三題〕〔１頁〕〔中村不折の画〕〔１頁〕 〔コマ絵〕一～二 〔歳時記〕三～八 奥付 〔奥付裏広告〕二～四十一注1 〔初～第五版證標(コマ絵共)〕〔１頁〕

定價金五拾錢 ＜国会図＞

注１： 2－Dの注２と同じ。

2－F* **日本風景論**(第15版)□

政教社 明治三十年一月廿五日發行 菊判

目次〔１頁〕〔序〕〔１頁〕〔書評 (帝國文學)〕一～三 〔付言〕〔１頁〕〔書評(地學雜誌)〕一～四 〔書評 (地質學雜誌)〕一～三 〔挿画〕〔１頁〕〔書評(ジャパン・メイル新聞)〕一～二 〔挿画〕〔１頁〕〔題詞(貝原益軒)〕 本文〔図表共〕一～二百三十三丁〔自跋〕〔１頁〕〔コマ絵〕〔１頁〕 〔歳時記〕三～八 〔初～第拾五版證標 (コマ絵共)〕〔三頁〕 奥付 〔奥付裏広告〕〔二頁〕注1

定價金九拾錢 ＜早大図＞

注１： この広告欄には，『「河及湖澤」(→⊗３)，「地理學講義(拾貳版)」，「英文教科書」』が掲載されている。

2－G* **日本風景論**(全集第四巻)□

→⊗71

2－H* **日本風景論**(文庫版)□

岩波書店 昭和十二年九月十日第二刷発行注1 菊半截判

〔初版の表紙の写真〕〔１枚〕〔題トビラ〕〔１頁〕 解説〔小島烏水〕3～17 目次19～24 〔題詞(貝原益軒)〕25 本文〔図表共〕27～298 〔中村不折の画〕〔１頁〕〔歳時記〕300～308

定價四十錢 (岩波文庫) ＜筆者蔵＞

注１： 初版は，本書の奥付によると，『昭和十二年一月十五日発行』。

3 *山水叢書 **河及湖澤**注1

政教社 明治三十年一月廿五日發行 菊判

〔序〕〔１頁〕 目次〔１頁〕 本文一～百十四丁

定價金貳拾錢 ＜早大図＞

(全集第参巻 p. 332～468)

注１： 奥付裏広告に，『山水叢書 島及半島 近刊』とあるが，筆者の調査の範囲では，該当する書を見つけることはできなかった。

4 * **地理學 完**□注1 農學士 志賀重昂述 〔東京專門學校版〕注2 明治卅年一月製本〔印〕 菊判

本文一～百四十四

＜早大図＞

注１：「早稲田大学図書館 和漢圖書分類目録(十一)」昭和十五年七月現在(以下『早大目録』と略す)では，『東京專門學校講義録』と付記してある。本書の，請求記号ル－(類) 一九二(号)。

注２：表題紙による。⊗９，⊗11 及び ⊗11-A～D も同様。

5 ＊**内外地理學講義**　志賀重昂述　西遠教育會記
濱松　谷島書店　明治三十二年一月廿二日出版　菊判
緒言〔1頁〕〔漢詩三篇〕〔1頁〕　本文一～一八三
＜国会図＞
(備考) 緒言
〝本書ハ矧川志賀重昂先生カ西遠教育會ノ請ニ應シ其夏季講莚ニ於ケル八日間ノ講述筆記ナリ。・・・〟

6　**人材の地理的配布**
「日本人」　明治三十二年二月廿日　第四十四巻
(全集第貳卷 p. 149-163)

7　**厦門九江間の旅行**
「地學雑誌」注1　第13輯第141卷　明治33年9月15日發行　p. 519～528〔通輯頁〕
(承前)　同誌　第13輯第142巻　明治33年10月15日發行　p. 597～603〔通輯頁〕
注1：地理学専門誌に掲載された論文は，すべて，『地理学』のところへ分類する。

8　**南鳥島と北太平洋問題**
「地學雑誌」　第15輯第169卷　明治36年1月15日發行　p. 42-52〔通輯頁〕
(承前)　同誌　第15輯第170卷　明治36年2月15日發行　p. 135～143〔通輯頁〕

9 ＊**地理學**　完□注1　志賀重昂講述
〔東京專門學校藏版〕　明治卅四年三月製本〔印〕　菊判
目次〔2頁〕　本文一～一九〇頁
＜早大図＞
注1：「早大目録」によると，『東京專門學校講義録』と付記してある。又，書名を「地理學講義」と記しているが，誤り。本書の請求番号　ル一(類)　一九一(号)。
(内容) 目次
(一)　地理學の必要
(二)　日本地理考究の方針
　日本海岸の日本と太平洋岸の日本
　北日本と南日本
(三)　亞細亞地理考究の方針
(四)　支那地理考究の方針
(五)　歐羅巴地理考究の方針
(六)　亞弗利加州，太平洋，南北亞米利加洲地理考究
　米國史と日本史の地理的關係
(七)　餘意
　東洋と英國との最短行程
　タービン・システム汽船
　太平洋系と印度洋系の陸上連絡
　厦門の近事
　馬山浦門答

10 ＊**外國地理參考書**
全集第貳卷の凡例によると，〝明治三十五年初めて世に公刊〟とかかれているが，筆者の調査の範囲ではこの書物を見つけることはできなかった。
(全集第貳卷 p. 343～424)

11 ＊**地理學**　完□注1　農學士　志賀重昂講述
〔早稲田大學出版部藏版〕　菊判
目次一～五　本文一～五一六
＜早大図＞
(全集第四卷 p. 269-410)
注1：「早大目録」によると，『早稲田大學明治三十六年度講義錄』と付記してある。本書の請求番号ル一(類)九七五(号)。
(内容)　目次
(一)　地理學の定義
(二)　地理學の必要
(三)　日本地理考究の方針
　(縦)　日本海岸の日本と太平洋岸の日本
　北日本と南日本
(四)　亞細亞地理考究の方針
(五)　支那地理考究の方針
(六)　歐羅巴地理考究の方針
　(細目略)
(七)　亞弗利加洲，太洋洲，南北亞米利加洲
　地理考究の方針
　米國史と日本史の地理的關係
(八)　餘意
(九)　地形と人文
　(細目略)
(十)　地勢と人文
　(細目略)
(十一)　水と人文
　(細目略)
(十二)　洋海と人文
　(細目略)

11－A ＊**地理學**□注1 農學士 志賀重昂講述
〔早稲田大學出版部藏版〕 菊判
目次一～六 本文一～六〇二
＜早大図＞
注1：「早大目録」によると，『早稲田大學明治三七年度講義録』と付記してある。本書の請求番号 ルー(類) 一〇七七(号)。

11－B ＊**地理學**□注1 農學士 志賀重昂講述
〔早稲田大學出版部藏版〕 菊判
目次一～六 本文一～六〇二
＜早大図＞
注1：「早大目録」によると，『早稲田大學政治經濟科明治八三〔三八の誤植か〕年度講義録』と付記してある。本書の請求番号 ルー(類) 一二八二(号)。

11－C ＊**地理學**□注1 農學士 志賀重昂講述
〔早稲田大學出版部藏版〕 菊判
目次一～六 本文一～五四六
＜早大図＞
注1：「早大目録」によると，『早稲田大學歴史地理科明治三九年度講義録』と付記してある。本書の請求番号 ルー(類) 一四八七(号)。

11－D ＊**地理學**□注1 農學士 志賀重昂講述
〔早稲田大學出版部藏版〕 菊判
目次一～六 本文一～五四六
＜早大図＞
注1：「早大目録」によると，『早稲田大學政治經濟科明治四一年度講義録』と付記してある。本書の請求番号 ルー(類) 一四八七(号)。

12 **太醇中の小酵**□ 志賀矧川
「地學雑誌」第15輯第175卷 明治36年7月15日發行 p. 568-570〔通輯頁〕

13＊**地理教科書本邦篇**
冨山房 明治三十七年一月十八日訂正再版發行 注1 菊判
緒言一～六 目次一～四 本文一～二〇〇
定價金六十五錢 ＜国会図＞
注1：初版は本書の奥付によると，『明治三十六年四月十日發行』。

13－A ＊**地理教科書外國篇**
冨山房 明治三十七年三月十五日訂正再版發行 注1 菊判
上卷：目次一～三 本文一～八二
中卷：目次一～二 本文一～九〇
下卷：目次一～三 本文一～八八
定價金四拾錢（上），四拾五錢（中，下各）
注1：初版は，本書の奥付によると，上中下卷共，『明治三十七年一月廿九日發行』。国立国会図書館では，上・中・下卷の三冊が一冊に合本されている。

14 **日本と英米兩國** (其一)日本と米國 (其二)日本と英國 農學士 志賀重昂
「歴史地理」 第7卷第4號 明治38年4月14日發行 (其一) p. 1～5 (其二) p. 6～8

15 **ツイミ川(正稱ツーム・イ)**□
「地學雑誌」 第18年第205號 明治39年1月15日發行 p. 48～58

16 **琉球の話**
「歴史地理」 第8卷第10號 明治39年10月1日發行 p. 77～88

17＊**地理講話** 農學士 志賀重昂講述
早稲田大學出版部 明治三十九年十二月廿八日發行 菊判
發行の趣旨〔1頁〕 目次〔9頁〕 本文一～三一七
正價金六拾錢 (早稲田通俗講話第六編) ＜国会図＞

18 **道しるべ**□
「歴史地理」 第11卷第1號 明治41年1月1日發行 p. 280～284

19＊**最新地圖本邦之部**注1
冨山房 明治41年

19－A ＊**最新地図世界之部**注2
冨山房 明治41年
注1，2：両書共，「冨山房五十年」（冨山房，昭和11年）より採録。筆者は原本を未見。

20 **最近旅行中に蒐集せし物品の展覧及説明**
「地學雑誌」 第23年第266號 明治44年2月15日發行 p. 26～31

21＊世界寫眞圖説　雪

地理調査會，明治製版所　明治四十四年七月五日發行　27×37 cm

〔漢詩一篇〕〔1頁〕 地理調査費ノ主意〔1頁〕 目次〔英文併記〕〔6頁〕 本文〔おもに写真〕98枚

定價金貳圓　＜早大図＞

（全集第八卷附錄に抜萃して収録してある。）

22＊世界山水圖說□

冨山房　明治四十四年十月三十日五版注1　菊判

地理調査費ノ主意〔1頁〕〔地理調査費寄附ノ方法等〕〔2頁〕 挿畫及地圖目次〔1頁〕 目次一～四　本文〔写真・地図共〕一～二三〇

定價金壹圓　＜早大図＞

（全集第參卷 p. 159～331）

注1：本書の奥付によると，初版は『明治四十四年九月十五日發行』である。

23　近藤重蔵擇捉建標に就て重田文學士に答ふ

「歴史地理」 第19卷第3號　明治45年3月1日發行　p. 13～15

24　玖馬國の事情

「地學雜誌」 第27年第320號　大正4年8月5日發行　p. 26～40

（全集第壹卷 p. 410～419）

25＊続世界山水圖說□

冨山房　大正五年九月十八日三版發行注1　菊判

〔説明図〕〔1頁〕 目次一～五　挿畫目次〔1頁〕 本文〔写真・地図共〕一～三六二

定價金壹圓六拾錢　＜早大図＞

（全集第六卷 p. 153～267，第六卷の凡例によると，〝篇中，前卷收錄の「世界の奇觀」と重複せる部分はこれを削除した。〞と記してある。）

21＊國民当用世界當代地理

大正八年八月注1

（全集第六卷 p. 169～325）

注1：第六卷の凡例より。原本を筆者は未見。

27　太平洋近代の沿革　農學士　志賀重昂

「地學雜誌」 第34年第400號　大正11年4月18日發行　p. 1～9

28＊知られざる國々□注1

大正15年11月18日發行　四六判　特價二十錢

（全集第六卷 p. 327～439）

注1：原本を筆者は未見なので，㊧29の p. 80 より書誌的事項を採録する。

（内容）目次

一　日本に是より以上の大問題ありや

一　日本の人口處分如何　二　日本の石油政策如何

三　世界的關ケ原に於ける日本の向背如何

二　『日本に是より以上の大問題ありや』の解決

（細目略）

三　玖馬

四　伯剌西爾の南三洲一名溫帶三州

（細目略）

五　パラグアイ（巴拉圭）

（細目略）

六　智利の硝石地方（當時の時事文）

七　中部墨西哥

八　緬甸

九　オーマン（元書の甕蠻）

（細目略）

十　世界的川中島・世界的關ケ原

十一　沙漠の横斷（東西兩洋最新の最捷路）

十二　回教の國土（最最新の歐洲外交紛糾の泉源）（細目略）

十三　人種平等問題（是が日本民族發展の根本）

一　色白きが故に此地球を我物とする

十四　有色人種排斥の本家本元（南阿研究の大急務）

（細目略）

十五　南阿聯邦首府行（南阿聯邦首相との會見）

十六　商阿聯邦相スマッツ將軍に寄する書

十七　日本國民生存の根柢

29＊知られざる國々　編者　土方定一

日本評論社　昭和十八年五月五日發行　四六判

序〔土方定一〕一～二　目次一～三　解題篇目次〔1頁〕 解題篇〔土方定一〕三～八〇　本文篇目次〔1頁〕 本文篇八三～二六七

定價㊨貳圓　特別行爲税相當額八錢　合計貳圓八錢（明治文化叢書）　＜国会図＞

30　ヘヂン博士の言行□

「國民新聞」所載　時日不詳
(全集第貳卷 p. 97～101)

31　**間宮林藏東韃行程考**
(n. d.)
(全集第貳卷 p. 1～9)

32　**間宮海峽の發見者は誰**
「大役小志」所載
(全集第貳卷 p. 9～18)

33　**伊豆半島論**
(n. d.)
(全集第貳卷 p. 163～167)

(b)　地理学に関連する国内事情

34　**日本生產略**□
「日本人」 明治二十一年七月十八日以降　第八，十，十二，十三号連載
(全集第壹卷 p. 62～85)

35　**日本の地質と衆議院議員選擧區**
「日本人」 明治二十三年六月三日　第四十八號所載
(全集第壹卷 p. 56～59)

36　**水の經營**□
「人民」 明治三十六年十一月十三日所載
(全集第壹卷 p. 93～101)

37　**日本一の大問題**□
「日本一」 大正五年二月所載
(全集第壹卷 p. 101～104)

38　**小笠原島（善後方法）**
(n. d.)
(全集第貳卷 p. 168～175)

(c)　地理学に関連する海外事情

39＊**南洋時事**□
丸善商社書店　明治二十年四月出版　四六判
〔序詩（英文）〕一～二注1　〔序詩（諷詞）〕三～七注2
自序一～四　緒言一～五　本文一～百九十六　自跋一～六　〔跋詩〕一～二注3
＜早大図，一橋図＞
(全集第參卷 p. 1～111)
注 1，2，3：これらの用語は全集の目次より引用。
(内容) 目次（全集より）
第一章　クサイ島の地勢
第二章　クサイ島土人の減少
第三章　南洋は多事なり
第四章　南方の好隣国
第五章　日本と濠洲との貿易
第六章　日本貿易家の參考にすべきものあり
第七章　濠洲夢物語
第八章　濠洲列國の合縱獨立せんとする一大傾向（細目略）
第九章　濠洲の前途
第十章　新西蘭と日本
第十一章　ゴールドスミッス氏の荒村感懷（"Deserted Village."）の詩を讀みて感あり
第十二章　新西蘭の酋長ウキタコ氏との談話
第十三章　パナマ運河と南洋經濟との關係
第十四章　フェジー島ランガム長老の話
第十五章　タンガローア神靈の夢物語
第十六章　サモア國王に謁するの記
第十七章　布哇國と日本
第十八章　布哇在留日本移民

39—A＊**南洋時事　増補三版**※注1
丸善商社書店　明治廿二年十月二日出版　四六判
本文一～二百五　南洋時事附錄自序〔1頁〕　南洋時事附錄目次〔1頁〕　南洋時事附錄本文一～九十二　初版南洋時事諸新聞批評一～二十三
＜一橋図＞
(「南洋時事附錄」の部分は，全集第參卷 p. 112～157)
注1：「南洋時事」の本文の後に，「南洋時事附錄」として付加されている。
(備考)　南洋時事附錄自序
"予嘗て北海道，對馬，八丈島，瓦港（ヴンコワ），印度，臺灣，ラングーンに關する所見を開陳ゝたるありき。亦た是れ聊か心血の澆ぐ處，而ゑて殖產通商若くハ外交ゑ干係するものなれば，特ゑこれを此處ゑ登載し，以て南洋時事の附錄となす。
明治廿二年六月　　矧川生誌るす。"
(内容) 目次（全集より）
第一章　北海道を如何に開拓して最も多く利益を見る

可き乎
（細目略）
第二章　對馬島
第三章　近南洋紀行（八丈島致富策）
第四章　瓦島汽船航路と日本との關係
（細目略）
第五章　亞細亞大陸に於ける今後の一大新獨立國
（細目略）
第六章　臺灣論
第七章　支那外なる第二の上海

40　**亞細亞大陸に於ける今後の一新大獨立國**□ 注1
「日本人」　明治廿二年五月十八日　第廿五號所載
（全集第壹卷 p. 196～200）
注1：全集第參卷南洋時事附錄（㊧39―A）の第五章も同じ内容である。

41　**亞細亞に於ける佛蘭西**□
「日本人」　明治二十三年九月十八日　第五十五號所載
（全集第壹卷 p. 208～237）

42　**諸國物語**
「日本人」　明治二十年五月連載
（全集第貳卷 p. 139～149）

43　**玖馬國富源邦人を待つ**
「農業世界」　大正四年五月所載
（全集第壹卷 p. 311～317）

44　**日本一の大不見識**□
「日本一」　大正五年六月所載
（全集第壹卷 p. 317～320）

45　**世界に於ける日本人**
「時事新報」　大正五年十一月一日所載
（全集第壹卷 p. 320～326）

46　**世界第一の我利々々亡者**
「日本一」　大正五年十一月一日所載
（全集第壹卷 p. 326～331）

47　**無費用の海外發展補助機關設立の議**□
「日本一」　大正六年三月所載
（全集第壹卷 p. 331～338）

48　**海外發展の根本精神**□
「日本一」　大正六年九月所載
（全集第壹卷 p. 338～341）

49　**海外發展の不合格者**
「日本一」　大正七年三月所載
（全集第壹卷 p. 341～346）

50　**世界に於ける日本人の配布**
「日本一」　大正七年八月所載
（全集第壹卷 p. 347～349）

51　**大正八年の世界地圖―打破せらる可き世界地圖**
「日本一」　大正八年一月所載
（全集第貳卷 p. 175～184）

52　**最近の國際事項一束**
「日本一」　大正十年七月所載
（全集第壹卷 p. 354～360）

53　**日米理解の必須要件**
「日本一」　大正十年八月所載
（全集第壹卷 p. 360～365）

54　**歐米列强の内情と日本の立場**
「日本一」　大正十年十一月所載
（全集第壹卷 p. 365～372）

55　**最近世界各旅行の主意**□
「新三河」　大正十三年十月十六日所載
（全集第壹卷 p. 372～379）

56　**日本に最も知られざる方面**
「三河日報」　大正十四年八月二十五日連〔所の誤りか〕載
（全集第壹卷 p. 379～387）

57＊**日本人の閑却してゐたアラビア地方**
「波斯より土耳古まで」　文明協會刊行　大正十五年八月十五日発行　四六判　第2章　p. 48～71
＜一橋図＞

58 **北米史の一節（日本開國の濫觴）**
「続世界山水圖説」〔㊋25〕所載
（全集第貳卷 p. 125～131）

59 **南米史の一節（智利と日本）**
「続世界山水圖説」〔㊋25〕所載
（全集第貳卷 p. 132～138）

60 **日本と墨西哥との歴史的關係**
「続世界山水圖説」〔㊋25〕所載
（全集第貳卷 p. 118～125）

61 **大戰後の大金穴——猶太人の建國——**
(n. d.)
（全集第壹卷 p. 349～354）

62 **刻下の満蒙**
(n. d.)
（全集第壹卷 p. 388～397）

63 **太平洋岸に於ける日本人**注1
(n. d.)
（全集第壹卷 p. 397～400）
注1： ㊋22 の p. 199～203 にも収録。

64 **米本土及布哇在留日本人の教育**注1
(n. d.)
（全集第壹卷 p. 400～408）
注 1： ㊋22 の p. 204～215 にも収録。

65 **歐洲戰時の加奈太**注1
(n. d.)
（全集第壹卷 p. 409～410）
注 1： ㊋22 の p. 216～218 にも収録。

(d) その他（地理学に関連する）

66 **間宮林藏東韃行一百年紀念**
「大阪毎日新聞」 明治四十二年七月十一日所載
（全集第貳卷 p. 18～32）

67 **眼前萬里**□
「東京日日新聞」 明治四十三年十二月より約2カ月間連載注1
（全集第四卷 p. 195～268）
注1：第四卷の凡例より書誌的事項を引用する。

68＊**歐洲大戰の歴史地理**注1 早大教授 志賀重昂
「學術講演錄 第參輯」 大日本文明協會 p. 40～49
＜一橋図＞
注1：本書の凡例によると，会員へは無料頒布の旨が記してある。

69 **祖宗の揺籃**□
「國民新聞」 大正八年九月二十九日所載
（全集第貳卷 p. 62～66）

70 **世界の奇觀**□
(n. d.)
（全集第五卷 p. 365～426）

71＊**志賀重昂全集** 第壹卷～第八卷
編纂兼發行者 志賀富士男
志賀重昂全集刊行會 昭和三年二月～昭和四年三月
菊判
＜慶大図＞
(内容)
第壹卷
昭和三年七月二十日發行 〔写真(肖像)〕〔1枚〕注1
本文1～420
目次
經世治國篇 海外事情篇
注1：『枚』は『頁』と同義に使用する。

第貳卷
昭和三年九月二十五日發行 〔写真〕〔1枚〕 本文1～424
目次
歴史地理篇 人文地理學講義 外國地理參考書

第參卷
昭和二年十二月廿日發行 〔写真（肖像）〕〔1枚〕
本文1～468
目次
南洋時事 南洋時事附錄 世界山水圖説 山水叢書河及湖澤

第四卷

昭和三年五月三十日發行　〔写真〕〔1枚〕　本文1～418
目次
日本風景論　眼前萬里　地理學

第五卷
昭和三年二月十日發行　〔写真（肖像）〕〔1枚〕　本文1～426
目次
大役小志（前半部）　世界の奇觀

第六卷
昭和三年三月廿五日發行　〔写真〕〔1枚（2カット）〕注1　本文1～440
目次
大役小志（後半部）　續世界山水圖說　國民當用世界當代地理　知られざる國々
注1：　1頁に2カットの写真がのっている事を示す。

第七卷
昭和三年十一月二十五日發行　〔写真（肖像）〕〔1枚〕　本文1～399
目次
札幌在學日記（上）　講演集（上）　詩藻　序文集

第八卷
昭和四年三月廿日發行　年譜〔1頁〕〔写真〕〔1枚（2カット）〕　本文1～214　附錄
目次
札幌在學日記（下）　講演集（下）　随筆集　尺牘　諸家の追悼文　志賀重昂全集賛助員芳名録（縣別，五十音順）　世界寫眞圖說（抜萃）　編纂後記

第 III 章　書誌的注解

ここでは，前述の著作目録の書誌的注解を『ロ』を付した単行本及び論文について，順次に記す。

㊧2　日本風景論，

本書の成立をみると，雑誌「亜細亜」3（1）明治26年12月1日に，〝日本風景論〟，雑誌「日本人」16（明治27年7月）に風景論の一部を初出した。後，志賀は加筆し，挿絵・版画等を付して初版を明治27年10月に刊行した。本書の内，山の案内の部分は，主として来朝の外人向きのガイド・ブック，*Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*（英国公使館付書記官アーネスト・サトウと退役英国海軍士官ハウス共編，明治14年　1881年）を底本としている。[3)]

志賀の著書の特徴として，刷次（impression）が異なると，改・増訂が行なわれているものが，数多く見られるが，本書は徹底している。各版（edition）ごとに表紙を改め，内容も改・増訂しているのが，本書であり，古書蒐集家の注目となっている。小林義正は次のように述べている。

> ある本とは志賀重昂著「日本風景論」である。この書物がわが国の登山史上に占める地位については，いまさらいうまでもないが，明治二十七年十月に初版を発行して以来，重版につぐに重版，ついに十五版をかさね，のち志賀重昂全集に収録されたが，毎回かならず増訂がほどこされ，かつ版毎に表紙絵を変えたということも異例に属する。自分がこの本の異版に興味を感じて・・・[4)]

また，本文中の挿画，コマ絵等にも，工夫が施されている。

小島烏水は，㊧2―Hの『解説』で，「日本風景論」の初版から第14版までの出版年次を第5頁に記載している。但し，烏水が出版年次としているのは，印刷年月日であり，発行年月日ではない。筆者が作成した著作目録の出版事項は各版の奥付の発行年月日をとった。このような，誤解は，恐らく，烏水が，第15版（㊧2-F）の奥付をそのまま記載したことに起因したのであろう。

初版（㊧2）の奥付をみると，
明治廿七年十月廿四日印刷
明治廿七年十月廿七日發行
第15版の奥付をみると，
明治廿七年十月廿四日初版　印刷發行
烏水の解説をみると，
明治廿七年十月廿四日初版
の如くであり，第15版の奥付そのものが，印刷日と発行日を混同している結果であろう。

「日本風景論」の異本の種類は，初版から第15版までと，全集第四卷及び文庫本の17種類で，これらすべてを，小林義正は蒐集し，その異版表紙を写真で「山と書物」（築地書館　昭和32年）の中に示している。

初版から第14版までは，紙表紙であるが，第15版になって，はじめてクロース表紙になった。筆者が図書館

で接した異版のあるものは，再製本の際，表紙，裏表紙等，原本の体裁を損なっているため，原本を正確に書誌的に再現することはできなかった。

全集第四巻に収められているものは，凡例によると，〝原著の體容を尊重し･･･″となっているが，第何版にもとずいているか判明しない。全集の本文の始まりは，

〝「江山洵美是吾郷」（大槻磐渓）と･･･″

初版の本文の始まりは，

〝「江山洵美是吾郷」と･･･″

であり，磐渓の名前が明記されるのは，第4版からで，この点から推測すると，初版を示しているのではなさそうである。しかし，表紙画は，全集第四巻の凡例によると，〝初版の装幀に據ったものである。″と記してあるとおり，初版の画を模している。

文庫本は，『解説』(p. 6) で，烏水は次のようにのべている。

第十五版が，増訂を盡くした最後のものであるから，本文庫は，それに依った。但し初版の表紙を挿畫として挿入して置いた。

以上，「日本風景論」の書誌的注解を試みたが，筆者は異版全部に接する事ができなかったので，今後，好機をとらえて，完全な目録を作成してみたい。

㊇4　地理學，㊇9，㊇11，㊇11-A～D　地理學

「地理學」は著作目録に於いても，既に気付かれたように複雑で，同じ「地理學」の書名でも，内容が異なる。従って，筆者は目録に於て，これらを異本として区別した。その区別した理由及びそれらの異本の相互関係をしらべてみた。

「地理學」は第1図のように3系列に大別できよう。

(第1グループ)—㊇4

㊇4は目次がないが，筆者が，本文の見出しより作成すると，

(一)　地理学とは何ぞや

(二)　地理学の必要

(三)　地理学の区分

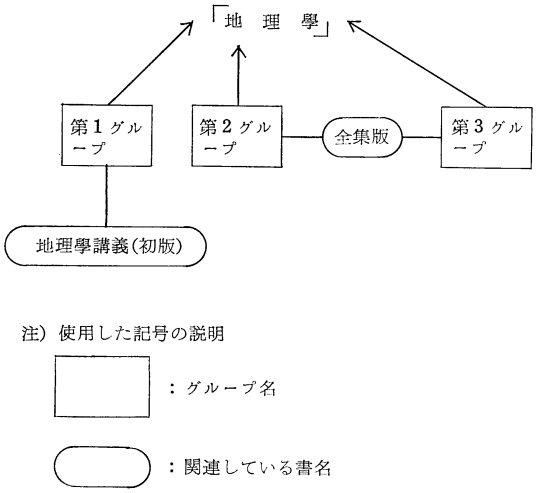
政治地理考究の方針

(一) 位置 (二) 面積 (中略) (十四) 余意

となる。

㊇1の「地理學講義」(初版) を同様に文中の見出しより目次を作成すると次のようになる。

地理学ノ必要



第1図　志賀「地理學」の系列図

地理学ノ区分

政治地理研窮ノ方針

位置　面積（以下略）

亜細亜ノ地理研究ノ方針

欧羅巴洲ノ地理研究ノ方針

亜弗利加ノ地理研究ノ方針

㊇4の出版年に関しては，確証はないが，「地理學」の内では，一番古く，又，㊇1は明治22年に出版されている点を考慮に入れて推測すると，㊇4は，㊇1「地理學講義」(初版) の流れの中で，やや構成を簡略化したものと推量される。

(第2グループ)—㊇9

㊇9は著作目録に記した目次の如く，志賀の地理学のかなめの思想である。『日本地理考究の方針』が組みこまれている。㊇4とは，内容構成的に異なり，全集版に近い。参考までに全集版の「地理學」の目次を示すと，

(一)　地理學の定義

(二)　地理學の必要

(三)　日本地理考究の方針

北日本と南日本

(四)　亜細亜地理考究の方針

(五)　支那地理考究の方針

(六)　亜弗利加洲，太平洲，南北亜米利加地理考究の方針

(七)　餘意

(八)　地形と人文

である。

（㊧1の中にも，部分的には，日本の地理学にふれている。例えば，『政治地理研究ノ方針』の中で，〝日本國ノ氣候，地位，地勢ト人民ノ職業トノ關係ヲ論ジタル…〟(p. 73) と記しているが，一章としては，まとまっていない。）

（第3グループ）—㊧11，11-A～D

このグループが，「地理學」の系列内では，よく知られているように思われる。国立国会図書館の蔵書目録によって調べてみても，このグループに属する「地理學」で，それは著作目録の㊧11—Cに相当するものである。

全集版にない，地勢・水・洋海と人文の関係を論じ，地人相関論を展開した部分が記載されており，志賀の地理学を知るよき手がかりとなっている。従って全集版は，第3グループの「地理學」を省略して出来上がっているとも考えられる。又，地形と人文，地勢と人文，洋海と人文の三節は，全集版第貳卷「人文地理學講義」(㊧71) に組みこまれており，同じ見出しでも，若干の変化はあるが，内容的には，ほぼ同種である。

㊧12　太醇中の小鷸

神保博士の「外國地名及人名書き方及稱へ方調査表」に於て，欠落している部分を志賀が指摘している。なお，神保博士とは，明治，大正時代の地質及び鉱物学者，神保小虎のことである。

㊧15　ツイミ川（正稱ツーム・イ）

ツイミ川（Tym 北樺太第一の大河）の調査結果報告書で，所在，名称等について論じている。

㊧18　道しるべ

論文の冒頭に，〝歴史地理研究の爲め旅行さるる人の爲め，聊か參考の一端にもと記す。〟と述べている。構成は，1. 日露の旧境界，2.『夫木集』選著の墓，3. いもぢいさん，4. 小島蕉園，その他から成立している。

㊧22　世界山水圖說・㊧25　続世界山水圖說

㊧22の本文の始まりに，〝君と共に世界の山水を指點せんとするに當り，先づ以て朝暉夕陰，自然の力が山水風景に反映する實際を畫きそれにより人の力（運輸交通）に說き及ぼすべきか。〟（全集第參卷 p.159）という一文が記されており，志賀の地理的見聞の態度を表現している。

㊧22・㊧25両書ともに，地理案内書的色彩が強い。両書の関係を，全集第六卷の凡例では，〝「續世界山水圖說」は大正五年八月初版を出版し其年の十月倏ち四版を重ねたるもので，「世界山水圖說」が海外に於ける山水を叙せるに對し，こは日本内陸の山水を對照圖說したものである。〟とのべている。

㊧28　知られざる國々

本書は，初版及びそれ以後の版とも筆者は，原本を見てないので，全集版を参考にして以下のべる。

全集第六卷の凡例によると，〝著者最後の著書〟としている。志賀が最初に世に問うた著述，「南洋時事」から三十余年経過し，再び晩年，世界旅行をした。その結果，書かれた著作の内の一冊である。「南洋時事」以来，世界各地を実際に見聞し，〝足跡世界に廿六萬マイル〟（東京朝日新聞 昭和2年4月7日）の集大成が本書といってよかろう。

㊧30　ヘヂン博士の言行

ヘヂン博士とは Sven Hedin (1865～1952) で，スウェーデンの探検家・地理学者である。

彼が東京地学協会に於いて，招待した時の様子を，文明の志士にたとえ，其の言行を称賛している。

㊧34　日本生産略

論文の構成は次の通りである。

1. 緒論
2. 日本の生活力を滅殺する一大原因
3. 瓦島汽船航路と日本との關係
4. 明治廿二年度歳出豫算を擬定す。

㊧36　水の經營

日本の将来を左右する問題として，海洋開拓は大問題であると主張している。現在，〝水〟という言葉は，工業用水，運河に結びつくがここでは異なる。

㊧37　日本一の大問題

日本の行くべき道は，満蒙朝鮮の大陸を生産地，日本内地を加工地，支那を市場とする三角法であるとし，海外発展を目標とする。

㊧39　南洋時事，㊧39-A　南洋時事增補三版

著作目録の㊧39—Aの，『南洋時事附錄自序』で志賀が記しているように，㊧39—Aは，㊧39で書かなかった部分について，後日，著述した書である。

その間の事情を，㊧39—Aの奥付でみると，

明治二十年四月　出版
　同　　年十月〔再版〕出版
同廿二年十月二日　增補三版出版

となっている。

従って，2年半後の第三版より，附錄の部分が，「南洋時事」の本文の後に付加されたことが判明する。

岩井の志賀重昂論[5]によると，附錄の成立時期を，第

三章は明治20年歳末の八丈島旅行の見聞記なので，21年初頭の作と考えている。筆者も，㊧39—Aの第三章の終りに，〝(本文中「本年」と記載せるは明治廿一年を指す。)〟(㊧39—A p. 40, 全集第参卷 p. 131) の一文より，岩井の見解に同意する。

附錄の第四章は，章末に，〝右一篇は明治廿年十月屬稿する處なり。〟(同書 p. 53, 全集には記載されていない。) と記されているので，この頃，完成したと思える。

附錄の第五～七章は，岩井によると，[6]「日本人」に掲載された論文で，各々明治22年5月，6月，7月発表された順に配列されていると述べている。附錄の第一，二章については，確証を得なかった。

㊧40 亞細亞大陸に於ける今後の一新大獨立國

『一新大獨立國』とは，インドをさし，その国の情勢を説明している。

㊧41 亞細亞に於ける佛蘭西

仏領インドシナの地利（農産物，鉱業等）の優位を説いている。

㊧44 日本一の大不見識

日本人の間に存する大不見識として，（1）海外といえば，直ちにうまい米の飯にありつけるという世界知らずの観念，（2）土地柄が経済上価値なしといえば，直ちにこれを無用とする観念（政治地理上重要であるにも拘らず）がある。「日本の南洋」開発の事実と併せ，参考にするようにとの志賀の警告文である。

㊧47 無費用の海外發展補助機關設立の議

論文の構成は次の通りである。

1. 同情に堪へぬ問答
2. 最も容易なる問
3. 戰時海外行に關する問答
4. 極めて簡單なる應答
5. 海外行書朝封簡の書き認
6. 唯實行あるのみ

㊧48 海外發展の根本精神

論文の構成は次の通りである。

1. でもでもは海外發展に適せず
2. 何國が最も日本人を觀迎する乎
3. 海外同胞が世話して呉れるや

㊧55 最近世界各旅行の主意

論文の構成は次の通りである。

1. 玖馬への渡航
2. 南阿弗利加渡航
3. 伯剌西爾溫帶三州の視察
4. パラグアイ國の視察
5. 中部墨西哥の視察

㊧67 眼前萬里

本書は，全集第四卷の凡例によると，〝(前略) 再三その「新聞切抜」に朱を點じ短を補し，推敲を重ねたる草藁を原本として集成完輯したものである。〟と著作の過程を志賀は書いている。

㊧69 祖宗の揺籃

東宮殿下の御書齋をどこに建てるかの最適地の検討。

㊧70 世界の奇觀

旅行案内書的内容をもつが，この中には，かなりユニークなタイトルがふくまれている。例えば，「日本の伊太利」，「日本の和蘭」，「日本の米國」などがあげられる。

日本の各地を志賀が実際に旅行し，見聞してきた外国と比較し，たとえた節がある。「日本ライン」という語も，志賀が造語したもので，この著作の中にも，「日本のラインと日本の瑞西」する節がある。昭和35年には，木曽川沿の不老公園内に，志賀への感謝の意を賞して，「日本ライン記念碑」が建てられた。

第1表 「南洋時事」「地理學講義」「日本風景論」の出版需要状況比較

書 名	初版の発行 年 月 (A)	第4版の発行 年 月 (B)	(B－A)/4
南洋時事	明治20年4月	明治24年2月	11.4カ月
地理學講義	明治22年8月	明治23年6月	2.5カ月
日本風景論	明治27年10月	明治28年5月	1.75カ月

この章の最後に，志賀の著作の内，彼の三大ベスト・セラー，「南洋時事」，「地理學講義」，「日本風景論」の出版状況を比較し，彼の著作が，いかに当時の読者に読まれたかをみてみる。各著作共，初版から第4版までに限定し，比較した。その結果が第1表である。

従って，「南洋時事」は初版を売りつくすのに，約1カ年間を要し，「地理學講義」は約2.5カ月，「日本風景論」は2カ月を要したことが判る。

第 IV 章 地理学専門誌に於ける反響

志賀重昂が我国の地理学界にいかなる反響をおよぼしたかを，当時の地理学専門誌を調査し，列記した。

A．収録の範囲

1. 調査期間

明治22年から昭和2年（没年）まで。

2.　対象となった専門誌

（誌名）	（発行機関名）
「地學雜誌」	東京地學協會
「地質學雜誌」	日本地質學會
「歴史と地理」	史學地理學同好會〔京大〕
「歴史及地理」	東京史學協會
「歴史地理」	日本歴史地理学研究會（後，日本歴史地理學會に改名）
「地理學評論」	日本地理學會

以上六誌を調査した。

B．記載方法

第Ⅰ章の『著作目録』の『2．論文の記述』の項に準ずる。

なお，文献番号は，『著作目録』より，引続いている。

専門誌に於ける反響の目録

72　**志賀氏地理學講義**注1

「地學雜誌」　第1輯第10號　明治22年10月25日發行　p. 504～505〔通輯頁〕

注1：書評者名明記されてなく不明。

73　**矧川志賀君の日本風景論を讀む**注1　山上萬次郎

「地學雜誌」　第6輯第71號　明治27年11月25日發行　p. 643～645〔通輯頁〕

注1：この書評は⊗2―Aに引用されている『注1』の文と同一。

74　**志賀重昂先生の日本風景論を讀む**注1　崎南生　謹評注2

「地學雜誌」　第6輯第71號　明治27年11月25日發行　p. 649～651〔通輯頁〕

注1：この書評は⊗2―Aに引用されている『注1』の文と同一。

注2：『崎南生』とは，「日本風景論」の注解によると，地学専攻の理学博士，巨智部忠承のことを示す。

75　**日本風景論を評す**注1　小川琢治

「地質學雜誌」　第2卷第17號　明治28年　p. 190～193〔通卷頁〕

注1：この書評は⊗2―Cに引用されている『注1』の文と同一。

76　**志賀重昂君を弔す**　山崎直方

「地理學評論」　第3卷第5號　昭和2年5月1日發行　p. 69～72

（全集第八卷 p. 225～227）

77　**志賀重昂氏を偲ぶ**注1

「地學雜誌」　第39年第460號　昭和2年6月15日發行　p. 57～58

注1：筆者不明。

次に地理学専門誌ではないが，「日本風景論」（⊗2―B）に引用され，掲載されている書評を例外として付記する。

78　**日本風景論**〔書評〕注1

「帝國文學」　第1號　明治28年發行　p. 132～134

注1：筆者不明。

前掲の専門誌に於ける反響の目録中の論文数と，第Ⅱ章の『著作目録』中で，地理学専門誌に掲載された論文数を各誌別に併せた結果が第2表である。

専門誌の性格をみると，「地學雜誌」，「地質學雜誌」は，理科系の地質学（地理学の一部を含む）関係の雜誌である。それは，地質学的地理学ともいえる雜誌である。

第2表　専門誌に於ける反響の論文数及び発表論文数の比較

誌　名	反響の論文数	志賀の発表論文数	刊行開始年(廃刊年)
地學雜誌	4	7	明治22年――
地質學雜誌	1	0	明治26年――
歴史と地理	0	0	大正6年～昭和9年
歴史及地理	0	0	大正6年5月～大正6年11月
歴史地理	0	4	明治32年～昭和18年
地理學評論	1	0	大正14年――

一方，「歴史と地理」，「歴史及地理」，「歴史地理」は，史学関係者によって発刊された雜誌である。それは歴史的地理学ともいえる雜誌であり，地質学的雜誌とは，対照的性格をもっていた。

志賀は，この両領域の雜誌に，関係し，やや地質学系統の分野に多く，反響があったようである。

しかし，これら5誌は厳密に分類するならば，地理学専門の発表誌とは，いい難い面もあるが，「地理學評論」は地理学分野の専門雑誌といえよう。但し，発刊年が大正末なので志賀の活躍していた時期とタイム・ラグがあったりして，掲載論文は追悼文一篇だけである。

志賀の地理学分野への影響を知るのに，石橋五郎の「我國地理學界の回顧」(「地理論叢」第八輯　昭和11年 p. 1～23) があげられる。石橋は，この論文の中で，

> 「日本風景論」「地人論」[7] ともに自分の如きも之によりて大いに地理的興味を鼓吹せられ，自分が地理學を專攻するに至った一因ともなったものであって…[8]

とのべている。

第 V 章　志賀の地理学 (I)

志賀の地理学のフレーム・ワークを，彼の地理学観が十二分に表明されている「地理學」(ここでは，全集版㊀71) を中心に，彼の言葉に従って，体系化を試みる。

A. 地理学の定義及び研究方法

地理学の定義について，志賀は，〝地理學は地球に關せる萬般の現象を考察する學問なり。〟(全集第4巻 p. 269) と，「地理學」の冒頭でことわっている。そして，〝所謂地理學にして未だ獨立獨歩せる一個の學問にあらずとせば，之れを大成して眞誠の學問と化醇せしむるは吾人後進者の任にあり，幼稚なる代りには亦た今後大いに発達するの餘地あるものあり〟(同書 p. 269) とし，〝凡そ地を離れて人無く，人を離れて事無し，地理學の考究は實に百般學問中の最も緊要なるものと知るべし。〟(同書 p. 270) という表現をしている。これらの3つの表現は，志賀の地理学観をよくあらわしている。

また，研究にあたっては，

> 地理學を研究するにあたっては，第一に誰にでも分るやうに注意し，(中略) 小學校の初歩の子供にでも分るやうにすると云ふことが必要である。(同書 p. 290)
> 第二に忘れないやようにすること。(同書 p. 290)
> 第三には此迄のやうに器械的に山川，都邑，物産，宗教，人情などを羅列するでなく，道理に訴へて道理上斯である斯くなければならぬと云ふやうに思考力を回らし，此力によりて記憶し，判別するように致さなければならぬ。(同書 p. 290，傍点筆者)

と述べている。

第一，二の点は，山崎直方博士，石橋五郎博士が志賀の地理学に対し，「地理學の民衆化であり興味化」，又は，「民衆本位の地理」と評している事に関連している態度であろう。[9]

第三の『道理』という語を使用している点は，単なる『国盡風のもの』から脱皮しようとする彼の姿勢がみられる。

B. 問題意識

本書の (七)『餘意』(同書 p. 347～355) は，僅か8ページ余りであるが，彼の地理学に対する問題意識を知るには，適当な資料であるので引用してみよう。

> (一)　山何に因りて峙つ，川何に因りて駛る，(中略) 之れを探討し且つ其の結果を推究する是れ地理學の一本領たり，
> (二)　邦國の境界面積何に因りて今日の狀をなす，人口何に因りて疎たり密たる (中略) 之れを稽査し且つ其の結果を察知する是れ地理學の一本領たり，而かも世の所謂「地理學」なるもの此所に出でず。毫も事實と事實との間を聯せる脈々の關係を說明せず，單に百多の事實を雜陳し，乾燥なる材料を羅列し，以て少壯年の徒に授け些も之れが脳裡を開發するの途に就かず。(同書 p. 347)
> 特に當今の急務は日本国民の能ふ丈け多數をして『世界に於ける日本國の位置如何』を悟了せしむるに在り。而して之れを明らかに悟了せしむるは先づ地理學の考究に在りとす。(同書 p. 347 傍点筆者)

以上の文章に，彼の地理的条件及び現象を調査・研究し，その因果関係を知ろうとする，科学的思考がみられよう。先にのべた，『地と人』の関係と，この(一)，(二)の表現をあわせて考慮すると，社会構造を地理的条件の反映とし，地理的形態は社会構造に即応して形づくられていることを示し，自然 (地理) と人間との影響の相互関係を志賀が論じようとする意図があったことが推測される。

次に，彼の地理学に対する意識の特徴として，日本の現状および今後の進路を世界的背景において考察しよう

としたことをあげなければならない。このことは先の〝餘意〟中の，〝世界に於ける日本國の位置如何〟という文章にも明らかであり，又，彼の地理学論文に国策的見解が多数述べられていることからも立証しうる。これに関連し，彼の地理学は政治地理学的傾向の濃厚な学問であったといえよう。[10)]

民族と国家の関係に於ては，地理上の関係と民族又は人種の特性が二大原因となるとし，〝世界の變遷は人と地との相互の働きたる力の結果である。〟（同書 p. 352）とのべている。

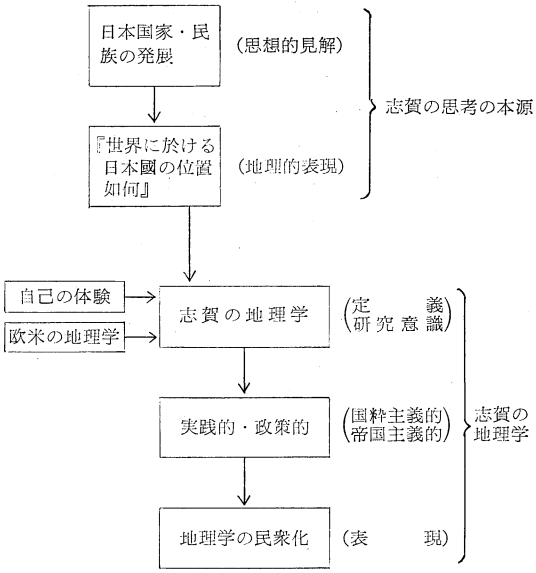
C. 性格

志賀に対する思想史の方面からの研究は，優れた論文が多数あるが，地理学に対する研究は，戦後はあまりなされていない。彼の地理学の定義・研究方法・意識は上述の如くであるが，地理学全体について次に論じてみよう。

山崎直方博士は，「志賀重昂君を弔す」(㊧76) 中で，〝極めて嚴格に云へば志賀君の此等の著は前者〔筆者注：小藤博士の「地文學講義」，矢津昌永の「日本地文學」〕ほどには科學的ではなかった。又其後の研究を恐らくは純科學的ではなかったかの如く見える。然しながら君の學界に於ける偉大なる功績は實に地理學の民衆化であり國民化であったのである。〟(㊧76 p. 70, 全集第八卷 p. 225) とのべている。

ここで山崎博士がいう〝科學的〟という意味は，よく筆者には理解できないが，一体，小藤，矢津の著作が科学的であり，志賀がそれ程〝科学的〟でなかったという見解には，大いに反論の余地がある。志賀の地理学の著作は，彼自身が，実際に経験・体験し，現地を踏破した結果にもとづく記述であり，従ってそのための制約もあろうが，単なる机上の知識ではないことは明らかである。地理学において，〝科学的〟であるとはどういうことか，又，それが社会現象をいかに解明しているかを問いただすための，一素材としても，志賀の地理学は重要な意味を内在していると筆者は考える。

山崎博士の言葉の後半については同感である。志賀の問題意識を論じた処でのべたとおり，彼自身は，地理学の社会化（民衆化）の指向を目ざしていた。彼は実践的性格を常にもっていて，その思考の根底には，〝日本民族・日本国家〟という事があり，日本の国家的発展に密接に結びつけていた。（この点でも，政治地理学ないし地政学の傾向が濃厚である。）これは，〝海外〟へ国民の眼



第2図　志賀の地理学の図式

を向けさせる事に関連し，〝海外発展〟ないし，〝殖民論〟へ関係する。

彼の処女作「南洋時事」において，既にハワイへの海外移住について次のようにのべている。

> 然レバ人アリ若シ布哇ニ移住民ヲ遣出スルノ利害ヲ諮フ者アレバ予輩ハ左ノ數件ヲ以テ其利益アルヲ奬說セントス。(㊧39　p. 187，全集第參卷 p. 99)

更に，この海外政策も，その基礎には，日本の地理的条件を前提にした思考がなされている。（この点に関しては，次の第 VI 章中の「知られざる國々」の項を参照）

志賀は〝日本の地理学〟を論じ，その方法論，内容においては，素朴で粗雑な面もあるが，明治時代，欧米から輸入された地理学を摂取醇化し，〝日本の地理学〟を述べた点では，論じるに値する。志賀の地理学は，日本地理学が，一度は通過せねばならないステップである。この節の最後に，志賀の地理学を第2図に筆者なりに，図式化してみた。

第 VI 章　志賀の地理学（II）

ここでは，志賀の地理学観をよりくわしく，彼の主著の解題の体裁をとって述べてみよう。

A.「地理學」

内容の紹介は，前章の志賀の地理学（I）でとりあげたので，ここでは略す。

われわれは，日常生活で，〝裏日本〟〝表日本〟という言葉を使用しているが，これらの語を，いつ頃から使い始めたかという点について，千葉は次のように述べている。

> 「裏日本」などという存在は，明らかに明治以前にはなかった概念なのですが，（中略）明治三十年代には，もう，この言葉がかなり一般的に使用されていたことは，一九〇六年〔筆者注：明治三十九年〕に出た山崎直方・佐藤伝蔵両氏共著の「大日本地誌」第五巻の北陸地方の総論第一行にこの地方を「裏日本の海岸」と規定しているので明らかです。[11]

志賀は，「地理學講義」（㊧1），「日本風景論」（㊧2），「地理學」（㊧9，11，11-A～D，全集版）に於ても，「日本海岸の日本と太平洋岸の日本」の概念を論じ区別しているが，どこで『裏日本』『表日本』の用語を著作の中で使用し始めているかを，探索してみた。

「地理學」の系列の，㊧11—A，つまり，明治37年度講義録の，（十）地勢と人文の節で，〝日本國の中央を横斷する大山系に因り，日本國を太平洋岸の日本（表日本）と，日本海岸の日本（裏日本）とに劃別（後略）〟（p. 385）と述べている。

志賀が，ここで，はっきりとこれらの用語を使用している。おそらく，これは講義録なので，講義中は，これ以前にも口頭で使用していた可能性があったのではないかと思われる。山崎，佐藤以前に，志賀が使用していたことは明らかである。

「地理學」がタイム・シリーズで，明治30，34，36～39，41年とそろっているので，推測しやすいが，ほかの著作の単行本，「地理教科書本邦篇」（㊧13）の中にも使用されていて，目次の見出しに，『第四章 日本帝國人文誌 第六節 表日本と裏日本』と記している。（㊧13，p. 72～76 で説明，記述している。）この事より，明治37年には，完全にこれらの語を活用していることが立証できる。

㊧11—A以後，出版された「地理學」では，当然，これらの語は使用されているが，他書でも，この『日本海岸の日本，太平洋岸の日本』を紹介する時には，『裏日本』『表日本』の語を使用している書物もある。たとえば，全集版「人文地理學講義」（㊧71）の p. 238 等で使用している。

志賀が，これらの語を日本で最初に造語したかどうか，又，江戸時代にも，これらの語が存在していたかどうかは，今後の研究調査を待つ。

B. 「日本風景論」

本書の出版された当時の時代背景を見ると，

明治27年4月
　ロンドンに於いて，日英通商条約改正交渉を開始。
明治27年7月
　日本軍韓国王宮を占領。
明治27年8月
　清国に宣戦布告（日清戦争）。
明治28年4月
　日清講和条約調印，三国干渉。

日清戦争，勝利，さらに三国干渉による条約の威圧的変更は，国民の関心を，以前の反政府運動から，国威発揚に向けた。〝日本のナショナリティの根拠を日本の自然に求める発想は，当時の近代派のなかに自然発生的にあったのだ。〟[12] と松田によって述べられているように，この自然的な発想を，地理学者の資格で基礎づけたのが，志賀であった。

志賀の著作は多数あるが，この内一番よく知られているのが本書であろう。事実，かって，『時事新報』で古今の愛読書百種を募られたとき，その答は，明治年間の書籍として，福沢の著書の外には，本書が答えられたと述べられている。[13]

本書の構成については，先掲の著作目録の目次をみられたい。内容を概括すると，先づ日本の江山の洵美なる理由として，

> 日本風景の瀟洒，美，跌宕なる所此の如く，其の此の如きある抑々故あり，曰く，
> 一．日本には氣候，海流の多變多様なる事
> 二．日本には水蒸氣の多量なる事
> 三．日本には火山岩の多々なる事
> 四．日本には流水の浸蝕激烈なる事
> （全集第四巻 p. 9）

をあげ，日本の風景の基調を，上記の四点に凝縮してその原因を求め，さらに，各項に就いて詳述している。又，志賀の得意とする『日本海岸の日本と太平洋岸の日

本』の相異をのべている。

彼の根底には，先に考察したように，常に『世界に於ける日本國の位置如何』という思考が存在していた。「日本風景論」においても絶えず欧米諸国との対比で日本の特殊性，美しさが強調される。たとえば，日本の火山についての文章を引用してみよう。

> 英吉利や，國土の美なる誠に此の如きものあらん，而かも竟に一活火山の在るなきを如何，活火山の在るなき猶ほ可，其の火山岩の一大山だに在るなきを如何，（中略）日本は，ラボックの英吉利に艶説する所を悉く網羅し盡くして，之れに加ふに天地間の「大」者たる火山の致る處に普遍するを看る。（同書 p. 86～87）

彼は古今の詩文，和歌，自作の漢詩を駆使し，本書は紀行文学としても，志賀の特色を十二分に発揮した独特の文学となっていることがアカデミックな地理学書をこえて，広く読者を得たといえよう。本書には，随所に日本の名山の案内をかねるように工夫され，版画・挿絵等も多数あり，特に，登山に関する第四章付録の「登山の氣風を興作すべし」という一文は，在来の信仰としての登山から脱却した近代登山を若者達にアピールし，彼等の冒険心を刺激した。「日本風景論」が日本登山史上の古典といわれる所以である。この功績により明治44年6月〝日本アルプスの父〟と称されるウエストンに次いで，日本山岳会は志賀を2人目の名誉会員に推した。

志賀の「日本風景論」の影響を受けた書物として，小島烏水の「日本山水論」（明治38年）があげられる。烏水は，〝〔明治〕三十年代に出た紀行文集のすぐれたものは殆んど小島烏水の著作といっても過言でなく・・・〟[14]といわれる位，優れた紀行文学者であり，かつ登山家でもあった。志賀の「日本風景論」（岩波文庫⊗2―H）の『解説』を書いたのも彼である。

次に，内容を地理学的視点からみると，〝景観〟をいかに，当時，志賀が把握していたかを知る必要がある。これ以前には，名所図絵的に風景を見て，まともに，風景が知識人の興味の対象となったことは少ないといえよう。志賀は，国民が国土の美しさに対して無意識でいた時，我国の風光の美を謳い上げつつ，国土と周囲の景観との統一的な地理学的解明をなしたのである。従来の日本三景のような古典的歌枕的風景美は一掃された観がある。

しかし，本質的には志賀は，古い美意識から脱却できず，新旧の両要素が混在している。この点がまさに「日本風景論」をベスト・セラーにしたゆえんである。

本書に対して，地理学者小川琢治，[15] 巨智部忠承[16]等の批評があったことを付記しておく。

C. 「知られざる國々」

志賀は「南洋時事」では，南洋諸島へ国民の関心を向けさせ，さらに彼は「知られざる國々」ではアラビア方面に国民の眼を開かせようとする。後書は彼の地理学の最後の書で，その地理学の集積であり，帰結となった。

現在では，石油資源問題等でアラビヤ半島の諸国に関する知識を多少なりともつようになったが，大正時代，その地域に日本人の眼を向けさせたという点に於ても高く評価すべき書である。

志賀は本稿の著作目録の中に，海外への進出に関する論文が多数みうけられることからも明らかなように，彼の思想全体から論ずると，生涯を貫いて，日本の海外発展ないし殖民論の思想を抱いていた。「南洋時事」「知られざる國々」との対比で，その思想を考えると，次の如くなろう。

「南洋時事」　日本の国力があまり自信のない時期
（海外への見方）国粋主義（消極的）

「知られざる國々」　日本の国力が自信のある時期
（海外への見方）帝国主義（積極的）

つまり，海外発展ないし殖民論を実行する日本の国力と政策のバランス関係で，初期は国粋的，晩期は帝国主義的に志賀は思想を変換した。

本書の第一～二章の地理学的問題設定は，まさに，彼のこうした晩期の思想の表明である。又，第三章以降も，同じ視点から観察している。

D. 「南洋時事」

志賀が最初に世に問うた著書が，「南洋時事」であり，志賀25才の時の著作である。

明治18年4月15日，朝鮮海峡にある巨文島を，英国海軍が占領するという事件がおきた。その時，志賀は軍艦筑波に便乗して対馬に渡り，密かに情況を視察した。この時の経験から生じた対馬防備の意見は，後年，同島の軍事上の設備を構築する際，軍に寄与するところがあったといわれている。⊗39―Aの第二章はこの際の意見の一端である。

明治19年2月，再び，軍艦築波に便乗して，約10か月にわたる南洋巡航についた。そのコースは，クサイ島→濠洲→ニュージランド→フィジー→サモア→ハワイである。この南洋諸島巡航の旅は，彼の生涯をきめた。若き志賀は，イギリスをはじめとする先進欧米諸国の残忍な帝国主義的侵略をまのあたりにみて，激動する世界の中で，小国日本の独立をどうしたら維持できるかという危機感を抱いたのであった。

この危機感が徳富蘇峰らの，当時の西欧民主の国々を理想化し，美化する幻想をもっていた西欧派[17]に対立し，国粋派[18]を定立させた。

志賀が日本に帰着した時期は，まさに条約改正をめぐっての議論がたたかわされていた時期であった。彼は，南洋巡航の見聞に基づき，2週間という短期間で一気に書上げたのが，「南洋時事」であり，この書物における，彼の『国粋保存旨義』の思想が，一躍，志賀の名を高らしめたのである。

本書を著する意図を，志賀は次のごとく述べている。

> (前略)我國在來ノ書籍ヲ閲スニ歐米兩國ニ關スル者甚ダ多シト雖ドモ，南洋ノ時事ヲ記載スルハ特ニ尠シトス。尋常ノ地理書，歴史書等ニモ亦コレヲ擧グル纔カニ二三葉ニ過ギズ。(㊲39 緒言 p. 4 全集第参卷諸言 p. 3)

本書の主題は，(1)欧米先進国の列強による南洋分割の威嚇，(2)日本の南洋方面に対する進出の可能性と必要性である。本書には，彼の思想体系の原型ともいうべき，〝国粋〟の思想が打出され，先の主題を貫通している。そして，彼の思想の枠組を構成しているものは，彼の地理学であり，世界↔日本の関係を地理的諸条件の中から観察する方法である。

「南洋時事」は，先述したように，南洋方面について，日本人はほとんど関心がなかった当時に，その方面の知識を与え，南洋政策を説き，日本民族の〝国粋〟思想を成立させた。日本民族の意識を昂揚させて，海外発展を鼓舞した書として，時代的意義は大きい。又，思想史的にも重要な書物で，現在でもとりあげるに値しよう。

本稿の終りに臨み，貴重なる文献の貸与，その他指導を賜わった一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター細谷新治教授に深甚の謝意を表したい。校閲の労をとられた慶応大学文学部図書館・情報学科小林 胖教授，及び，有益なる助言をいただいた同大学経済学部高橋潤二郎教授に心から拝謝する。又，本研究の為に貴重なる図書の閲覧を許された各図書館(室)，特に早稲田大学図書館に対して厚く御礼申し上げる。

1) 岩根保重．〝徳川時代に於ける外国地理関係著訳の概観並に資料，〟**地理論叢**，第4輯，1934，p. 81-85.

2) 石田龍次郎．〝日本の地理学—その発達と性格についての小論—，〟**地理**，vol. 10, no. 1, 1965, p. 44.

3) 後年，チェンバレンとメーゾンが第3版から編集を交替し，内容に改訂を加え，改題し，*Murray's Handbook for Travellers in Japan* として出版された．

4) 小林義正．山と書物．東京，築地書館，1957. p. 153

5) 岩井忠熊．〝志賀重昂論（上)，〟**立命館文学**，no. 186, 1960, p. 20.

6) *Ibid.*, p. 20.

7) 内村鑑三の著作．最初は「地理學考」(明治27年)として出版さん．後年，改題され，「地人論」(明治30年）となる．

8) 石橋五郎．〝我国地理学の回顧〟**地理論叢**，第8輯 1936, p. 4.

9) 山崎直方．〝志賀重昂君を弔す，〟**地理学評論**, vol. 3, no. 5, 1927, p. 71.
石橋，*op. cit.*, p. 4.

10) 長尾正憲．〝志賀重昂と地理学，〟**地理学**，vol. 5, no. 4, 1937, p. 178.

11) 千葉徳爾．〝いわゆる「裏日本」の形成について—歴史地理試論—，〟**歴史地理学紀要**，no. 6, 1964, p. 165.

12) 松田道雄．志賀重昂『日本風景論』<桑原武夫編．日本の名著—近代の思想．東京，中央公論社，1962(中公新書)>p. 43.

13) 志賀重昂．日本風景論．小島烏水解説．東京，岩波書店，1937, p. 3-4.

14) 岡野他家夫．日本出版文化史．東京，春歩堂，1959. p. 192.

15) 小川琢治は㊲75で，「日本風景論」中の日本島嶼を成している岩石の志賀の見解に対し，地質学的立場より批判を行なっている．

16) 巨智部忠承は㊲74で，地質学的立場より，小川と同様に批判を行なっている．

17) 『西欧派』とは，徳富蘇峰が中心となり，民友社を率い，雑誌「国民之友」によって，平民的欧化主義を主張したグループ．

18) 『国粋派』とは，三宅雪嶺，志賀重昂等が中心となり，政教社を成立し，雑誌「日本人」によって，国粋保存旨義を主張したグループ．

参 考 文 献

『著作目録』及び『地理学専門誌に於ける反響の目録』を作成上，利用した文献．（著者のアルファベット順に排列する.）

1. 国立国会図書館整理部．国立国会図書館所蔵和雑誌目録．東京，国立国会図書館，1974．1403 p.
2. 国立国会図書館整理部．国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録　第1巻．東京，国立国会図書館，1971．1009 p.
3. 文部省大学学術局．学術図書総合目録　自然科学和文篇 1968 年版．東京，東京電機大学局，1968．1342 p.
4. 昭和女子大学近代文学研究会．〔志賀重昂〕著作年表 ＜近代文学研究叢書．第26巻．東京，昭和女子大学，昭和42年 [1967]＞ p. 153～170.
5. 帝国図書館．帝国図書館和漢図書書名目録 第2編．東京，帝国図書館，1903．639 p.
6. 帝国図書館．帝国図書館和漢図書書名目録 第3編．東京，帝国図書館，1913．1397 p.
7. 早稲田大学図書館．早稲田大学図書館和漢書分類目録（十一）．東京，早稲田大学図書館，1941．91 p.